

成員の等質性・異質性が集団生産性に及ぼす効果の研究： Locus of control に基づく成員の構成と時間経過の交互作用について*

佐々木 薫**

問 題

等質な成員から構成される集団と異質な成員から成る集団とでは、どちらがより生産的であるかという問いは、実証的集団研究の比較的早い時期から研究者の間で追求されてきている。Hoffman (1959) は、成員のパーソナリティに関して類似性の高い集団、類似性のきわめて低い集団、そして相反するパーソナリティから成る集団の3タイプを編成し、問題解決課題を与えて集団の成績を検討し、類似性の高い集団（等質集団）よりも他のタイプの集団（非等質集団）の方が効果的であることを明らかにしており、Hoffman & Maier (1961) も、同じ結論を得ており、さらに加えて、男女混成集団の方が同性集団よりも、対人関係に関する討議課題において有効であることを見出している。また、Goldman (1965) や Laughlin, Branch, & Johnson (1969) によれば、他の条件が同じであれば、課題に関連する多様な能力をもった成員から成る異質集団の方が、類似の能力をもった成員から成る等質集団よりも、効果的であったという。さらにまた、白樫 (1978) は Rotter (1966) の locus of control 尺度による内的・外的統制型のパーソナリティに着目し、この型に関して等質な集団と異質な集団を構成して問題解決課題を与え、その成績を比較して異質集団の方が効果的であることを見出している。

他方、Harvey, Hunt, & Schroder (1961) や Tuckman (1967) は、成員たちの抽象能力や統合的複雑性といった認知レベルの機能について等質な集団の方が、その異質な集団よりも、わずか

ながら高い集団効果性を示したという。また、Triandis, Hall, & Ewen (1965) は2人集団の創造的産出量に関して、能力の等質で社会的態度の異質な組み合わせが最も効果的であったという。さらにまた、Delbecq & Kaplan (1968) によれば、人種の異質性は対人的緊張を生じやすく、それが集団の成果に負の影響を及ぼす場合があることを指摘している。

このように見えてくると、成員構成の等質性・異質性と集団生産性との関係を検討するには、まず何に関する等質・異質なのかを明確にした上で、次にどのような課題についての集団成績かを指定しなければならぬことがわかる。

本研究では Rotter (1966) の locus of control 尺度による内的・外的統制型（日本版は吉田・白樫, 1975による）に基づいて等質性・異質性を定義することとした。すなわち、尺度得点（IE 得点と呼ばれる）は高いほど外的統制に傾いていることを表しているので、この得点の分散が等質集団で小さく異質集団で有意に大きくなるように、しかも平均は両集団間で等しくなるように、2種の集団を構成したのである。

第1実験は、このように定義された等質・異質集団が、タイプの異なる課題において成績を変動させるであろうこと、すなわち、集団の成績には成員構成（等質か異質か）と課題のタイプとの交互作用効果が認められるであろうことを明らかにしようとした。ところが、この仮説は検証されず、代わって意外な発見が得られた。それは時間経過の効果である。つまり、異質集団は等質集団に比べ課題遂行の体制を作り上げるのに長い時間がかかるらしいということである。

*キーワード：集団生産性、等質・異質集団、時間的推移

**関西学院大学社会学部教授